も、もし然らば ta なる語尾は如何に說くべきであらうか、もとより此の語に侍者の意味はあるがしかし其の本來の意は周圍と云ふのであらう詳しく云へば täkrä=herum; in de Umgegend (Vambèry, Etymologisches Wörterbuch s. 171) に k の添はつたものである、それで自分は之を周圍と見て täkräk-in-tä 卽ち「彼等のまはりに於て」の意に解釋したい、漢譯に侍者なる語が見えては居るが其意は第十五行にて現はされ居ると見られやう、卽ち各佛の周圍に五百菩薩一切諸天が常に敬禮するといふので足りるであらうと思ふ、ともかく此の語を侍者と譯するならば ta なる語尾によりて現はさるゝ格を考がへなければならぬ、譯者の考の如くならば此の語尾は勿論此處に付してはならぬ筈である。

五、第十四行第二語 ökos を「智惠アル」と譯してあるがそれは ökü̈s と讀み「多くの」の意と見るべきである、譯者は此の前の語 älglancsiz を「死セザル」と譯し「死せざるは字の如く譯せるなれど支那譯に對照するに無量の字に該當す蓋し死とは限量にして生なれば無限の變化あれども死は休絕せるにより限量を表せるが如し」と註解せられた、余も此の語に無限、無盡等の意の存することは否定しない。しかしながら此の語丈けが漢譯の無量に相當するのではなくして、「盡きざる」といふ形容詞が「多くの」といふ形容詞を更に形容して「盡きざる多くの」の二語で無量の意に相當するのである、ökü̈s に「多くの」の意のあることは Müller; Uigurica I. 39 を御覽になれば解る。

六、第十六行目第一語を ol と讀んで「アリ」と譯してあるが文法の上から考がへてもそんな筈はない、實際寫眞及び二十二頁の石版摺を見ても明らかに lar となつて居るではないか、lar でなければならぬ理由はもとより